平木ノート

小説「ンソ」

平木ノート

エピローグ

「静かな真実 ー2041年12月ー」

しろい。

真っ白な建物の真っ白な一室で、もうほとんど彼の意識は、光に侵されていた。

まぶしい。

部屋の窓枠を歪めて入ってくる外の光は、暖かい春の日のそれのように、彼には感じられる。

もう、ならない。

声にできなくなったのが2ヶ月ほど前。それから自分の思考のためだけに、途端に用途の限られた彼の言葉

は、少しずつ単語に集約され、今ではもう、彼の思考に、言葉はほとんど存在しない。言葉だったものは、透き通ったノイズ、砂漠の夜に舞う小さな砂粒の１つ１つに限りなく近づいていた。
ベッドからまっすぐ天井を見上げる彼の傍らには、初老の女性がいた。
およそ40年の歳月を、彼女は彼と共に過ごしてきたのだ。
寝たきりになり半年が過ぎ、寒い冬を前にして彼が声すらも失ったことで、彼女はすでに彼の終わりを受け入れ、もう十分悲しんだ。今さら言葉にすることなんて、昨日とは違う天気、風、そんな日常だろう。

今日、どうやら彼女は分かっている。その風から、空気から、今日なのだろう、と。
彼女は、明日の来ない彼の、その左手を握ることもなく、ただじっと見つめている。
その小指は蝉の抜け殻のように固く丸まっている。
結局、彼女はこの指を許すことができなかった。
２人の歴史において、ほとんどすべてのアプローチは、彼女から彼への一方的なものだった。会話も、繋いだ手も、もう忘れてしまった愛の告白も、すべて彼女の方から差し伸べ、届けられた。そして、そのすべ

てが、少なくとも指１本分、拒絶されてきたのだった。
おおよその彼自身は彼女を受け入れていても、今彼女が見つめる先、彼の左手の小指は1度も、その頑然とした形を解くことはなかった。
眠たそうな目をした彼女が、ふと、少しだけ瞳を大きくして、窓の外を向いた。
「指だってあなただものねえ。とっても頑固で、臆病な・・・」体も動かず、声も出なくなった彼に、その言葉が届いているのかを、彼女が知る方法はない。

そうだ。そうかもしれない。

この時、彼は、左小指の力が抜けていくのを感じた。機微とも言えるこのわずかな変化は、端から見ても気付くようなものではない。
「ありがとう」
この彼女の最後の言葉で、小指は再び力を取り戻した。寒さや外敵から身を守るように、しっかりと丸まってしまった。
彼は笑った。彼の思考の中、静かな夜の砂漠で１人、笑い、そして、
去って行った。
「いま、笑ったでしょ」
その事実だけ、彼女は悟った。
その幸福な誤解を解く方法も、必要

も、その部屋にはなかった。

「青い嘘 ー2000年7月ー」

目が覚めたのか。
ゆっくりと瞼を開くと、部屋のカーテン、ポスター、本棚、すべてがただの景色として映る。ほとんどの意味を忘れてる。
なんて気持ちいいんだろう。
文字通り、メモリを解放した直後のような、この目覚めの一瞬ほど心地の良いものはない。
高校に入学すると同時に家を出て、高校を卒業する少し前に寮も出た。
今はバイトをしながらの一人暮らし。親も友人も、俺の生活には存在しない。そういう自由を築いてきた。
朝起きると決まって、アパートの３

階にあるこの部屋のベランダで煙草を吸う。
まだまだ忘れたいことばかりなのだろう。

午前中は、パソコンに向かうことにしている。
俺のような人間が小説家になろうと考えるのは、とても自然なことだ。
生まれる時代を間違えた人間に用意された抜け道なのだと思う。どうしても他の人と同じ景色が見えない。
それが１つの価値として認められる。小説家という職業が成立する限り、人は捨てたものではない。
ディスプレイに映る自分ばかりを見

つめながら、キーボードを叩く手は止まらない。文字数はすでに10万を超えているが、物語はまだまだ終わりそうにない。この作品が発表されることはないだろう。この面倒くさい、自分そっくりの人間の物語を書き終えたら、俺は小説家になろう、そう決めていた。

12時ちょうどには昼飯の支度をはじめ、午後2時にはバイト先のスーパーにいる。気付くとまたここにいる。ここに来る途中の道なんて、目を閉じているのと同じだ。今日が晴れなのか曇りなのかも覚えていない。

「これとこれ、値段チェックしといて」
マネージャーに頼まれた俺は、売り場に向かった。テーマパークの入場ゲートのように騒がしいレジの列とは少し離れた並びに、箱入りの和菓子を売っている場所がある。そこにぽつんと立たされている女の子に、俺は声をかけた。
「あのこれ、値段見てもらっていい」
「あ、はい・・・」そう言ってすぐ、彼女の目は、レジのボタンの上を慌ただしく駆け回った。
「売価チェックってボタンがあるでしょ。確か左下のほう」

「あ、ありました。はい、えっと、この２つですねーーー」1、2週間前に新しく入った子がいる、という話を聞いていた。少し高めのはきはきとした声の彼女は、近所の高校生らしい。和菓子売り場の制服のせいもあるかもしれないが、俺と同い年か、少し上ぐらいに見える。「どちらも88円ですね」
「おっけー。ありがとう」
「いえ、こちらこそ教えてもらって」
俺は、黙ったまま彼女を見ていた。
「その、売価チェック」不思議なもので、俺が何も言わなくてもWhat

の疑問文はしっかり相手に伝わった。そして、彼女はそれに答えた。
「ああそんなこと。ここってほとんど教えてくれないでしょ、レジ。だから当たり前だよ」
こんなことを言う人間であれば、続けて「まあ、がんばって」とか「なんでも聞いてよ」とか言うのが自然なのだ。それを言わなくて、いつもどこか不自然な人間に映ってしまう。仕方がない。俺という人間の仕組み、自然、素直さは、他の人間にとって不自然なのだ。
さっさと立ち去ろうとする俺の背中に、彼女は、
「ありがとうございます」

と、思ったより違和感なく言ってくれた。
いい子だ。少しおとなしそうだけど、それが自然だろう。
俺は、一瞬、自分の左手に目をやる。小指と薬指の2本だけが折り曲がっていた。そんなによくあることじゃない。
左手の確信とともに、本当にいい子だ、と改める。素直ないい子と出会った時ほど、この左手が嫌になることはない。

翌日、夕方の休憩で彼女と一緒になった。
彼女は、飲み物を買ってきて俺に挨

拶をすると、横に座っていいかと尋ねた。ここに来て日が浅い彼女にとっては、たった一度話しただけの俺も知り合いになるのかもしれない。
「ケガですか」
「ん、何が」
「篠原さんですよ」2人きりというので意識して、左手をしばらくポケットに突っ込んでいたのがおかしく映ったのだろうか。「ーーー左手」
「ああ、ケガなんてないよ」
少し沈黙。
「嘘です」
嘘。そんなのはありふれてる。それ

を指摘していい人間なんていない。
「真山さんって土日だよね。平日はあの和菓子売り場、ほとんどおばさんが入っててね」言いながら、横目で彼女の顔を確認した。細長い首の上にしっかりと乗っかっている。その顔は、俺がわざとらしく始めたテーマには何の反応も示さない。
「見せてください」
強情な目。ほとんど遠くから見たことしかなかったけど、こんなに積極的な子だっただろうか。何か良いことでもあって、ハイになってるのかもしれない。
「いや、だいじょぶだから」笑って、なんとなく右手もポケットに

突っ込んだ。
「ほらあ」彼女は大きな声を出した。言ってから頬を膨らませているかもしれない。それにしても驚くほど元気だ。
「ほらって」
「大丈夫ってことは何かしたんじゃないですかあ。ほらほらあー」
「ちょっと待って」今にも俺の左手に飛びつかんばかりの彼女に、少し向き直って、制止の意味で右手を開いて見せた。こういうことが今までに何度もあった。特別焦るようなことじゃない。俺は聞いた。「じゃあ、心配してる、って言ってみて」
「心配してます」

即答だ。それなりに不思議なことを不思議なタイミングで要求したつもりだったが、こっちが面食らってしまった。即答は彼女なりの誠意の現れだろうか。本当にいい子だ。でも、そんな表面的な態度は、俺にはなんの価値もない。現に、今ポケットの左手はほとんどグーの形になっていた。それにしてもここまで心配していないとは。これも驚きだ。
「なんですかこれ」
・・・気付きかけた時にはもう遅かった。
その瞬間、頭が真っ白になった。
彼女の勢いを制止するのに出した右手は、その名残で、無防備に、露呈

していた。
「なんのサインです？ ３？」
右手を出していたからって、それもほとんどの場合、致命的な要因にはならない。そこに、彼女のこんなにも明らかな「嘘」が想定外だった。
親指から中指まで、無意識に３本も折り曲がった右手を、再びポケットに仕舞い、立ち上がる。
「全然。まったく。心配してない・・・」
囁くような声で、彼女の嘘に小さな反撃をしたつもりで、その場を去った。
喫煙所で、煙草に火をつけるとすぐ明らかになる後悔。少し落ち着いて

考えると、完全に冷静じゃなかった。何も言わず、あの場をあとにするべきだった。

それから数日は自問自答を繰り返した。
結局、俺は、この指を、誰かに知ってもらいたかったんじゃないか、
と———。

「篠原さーん。お疲れさまです」
あれからちょうど１週間、日曜は篠原さんと休憩が一緒になるみたい。
「お疲れ。どう、今日もひま？」
「はいとても」休憩所のソファ、篠原さんの横に腰掛けながら、一瞬、彼のズボンの左ポケットに目をやる。この前と同じ、篠原さんの左手が仕舞ってある。「申し訳ないですよ。これで時給もらってるのが」
「いいんじゃない。そういう仕事なんだから」
この1週間、私は、冗談のようなことを夢中になって考えていた。ちょうど1週間前に、彼と別れたこともあった思う。大人が酒を飲んで馬鹿

騒ぎをする、それと同じような行為だったのかもしれない。けど、何かを忘れるためだとしても、夢中になって考えて、私は、あるふざけた仮定にたどり着いた。今日、それを検証してみたいと思う。
このバイトを始めてから、暇な時間、篠原さんを見かけるたびに、彼の小指や薬指、時には中指や人差し指がきれいに丸まっているのに、私は気付いた。私も真似してみたけど、小指と薬指の２本、あるいは本数が増えるほど、折るのは簡単。でも、小指だけをあんなにきれいに折り畳むのはなかなか難しい。
私は、篠原さんの左手、その指が一

時的なケガと呼ぶようなものではないと知っていた。そういう病気なのかもしれないけど、1週間前、この休憩所での「心配してる」という私の言葉は、ケガや病気と思って、心配して、そんなんじゃなかった。不思議。わくわくすると言ってもいいくらい。興味本位と言われればまさにそう。知りたかった、篠原さんのことを。それを彼は、見透かすようなことを言って去った。そして、あのときの右手。
「篠原さん」真剣そうな眼差しを向けてみる。
「ん」重たい瞼の奥から彼の目は、一度だけ私の目を見た。

「飲み物おごってください」
「何かと思ったよ」何かと思ったのだろう。「よっぽど金がないな。まあ、がーーー」
「じゃんけん、で勝ったら」
篠原さんは目を細めて少し笑った。いじわるそうに。「じゃあ、俺が勝ったら？」
「そしたら教えてください、この前のこと」
「よく分からないけど、それって勝負成り立ってるか。真山さんってもう少し賢い子に見えたけどなあ」
今のところ手応えはまあまあだと思う。それにしても、篠原さんって、少し近寄りがたいところはあるけ

ど、いい人だ。そんな気がする。
「賢いですよ私。ま、そゆことで、いいですか。じゃんけん」
篠原さんは、黙ってしばらく私を見ていた。
この時間、そして、次の掛け声のテンポが大事。私の経験では、咄嗟のじゃんけんはほとんどパーで勝てる。逆に、相手に十分な余裕を持たせて、ゆっくりとやるじゃんけんほど、相手はグーを出しにくくなる。
けどそれでも、篠原さんは必ずグーを出すはずだ。お願いだから出して欲しい。出せ。
私は、小さく息を吸い込んだ。
「じゃーんけーん」

私の極端にゆっくりとした掛け声に合わせて、篠原さんの右手がそっと振り上げられる。
否定さえされなければいい。
偶然でも、私のふざけた仮定の範囲内で、このじゃんけんが終われば、それで満足。
ほとんど自由落下のように振り降ろされる彼の右手めがけて、私は小さく叫んだ。
「今すぐ死にたい！」
私の右手はパー。
「やったあ」
ずっと目で追っていた篠原さんの右手は、私が叫ぶのとほぼ同時に、力強いグーの形になっていた。

私の「やったあ」は、私のふざけた仮定が、まだ仮定として存続することへの「やったあ」だ。
にやけた顔で私が出した右手に、篠原さんは静かに150円を置いた。
私は、スキップしたくなる両足に、わざと落ち着いた足取りを命じて、ゆっくりと自販機へ向かった。
おしまい。しばらくはこれで十分。
また1週間は、1日に数える程しかお客の来ない和菓子売り場で1人、ふざけた妄想に浸っていられる。自分が飽きるまで。うん、やっぱり篠原さんの指は「割合」だ。私の思考が至った1つの仮定。私が「真っ赤

な嘘」を声にすると同時のじゃんけんで、強く握りしめられた右手の平。あれは、つまり「10割」。
きっとポケットの中の左手も握りこぶしになっていたはず。売り場で何度も見かけた、折り曲っている小指、薬指、あれは「ありふれた嘘」の証明、センサー。1週間前、私の「8割の嘘」を見抜いたように、篠原さんの指はいつも、この世界の嘘を暴くのだ。
ーーーなんて。
きっと篠原さんは、病気か何かなのかもしれない。ネットでちょっと調べれば簡単に分かったことかもしれ

ない。だとしたら、私のやっていることはとても不謹慎なことだ。もっと言えば、篠原さんが言っていた通り、彼は病気でも何でもないのかもしれない。とにかく言えるのは、私はたった今、彼に「変な子」と思われた。じゃんけんの「ぽん」のかわりに「死にたい」なんて言った子は、人類史上初めてじゃないかと思う。私は、自分のささやかな楽しみのために、もしかしたら彼を傷つけたのかもしれないけど、同時に、私も彼に馬鹿にされたと思う。じゃんけんでいうなら、これであいこ。なんだか自分に言い聞かせているようで、うん、もうやめよう。過ぎたこ

と。彼が怒れば、私は謝る。そう、心に決めた。
自販機の前で、何にしようか考えながら、無意識がふとソファの方へ向いて、何気なく篠原さんの姿が目に映った。
「ごめんなさい」と叫びたくなった。
でも、同時に、喉元は息を止めた時のように強く締まって、どんな思いも吐き出させはしない、そう私を押さえつけた。
自販機の適当なボタンを押す。
ペットボトルが機械に揉まれながら潔い音で吐き出される。
篠原さんは、自分の右手を握りしめ

て、ただじっと見つめている。
昨日、今日のものではない。そんな乾ききった悲しみの目が、右手に向けられていた。身体的特徴とは、そういうものなんだ。私は、そこでやっと知った。
緊張すると指が丸まってしまう、そんな病気なのではないか。最悪だ。最低。そんなこと、すぐ予想もつきそうなものなのに。きっとそうだ。私は。
運命や人の歴史、時間、その重みを、初めて、自分の目で見た。
本当に浅はかだ。
やっぱり私は酔っていたのだ。彼氏と別れて、人よりも不幸で、多少の

ことなら許されるだろう、とそんな甘えがあった。
話そう。
そうするしかない。たとえ、それも自分勝手に映っても、ふざけるな、と罵られても、それをするもしないも篠原さんの自由だけど、もう私にできる唯一の誠意は、正直であることしかない。
戻って来る私に気付いて、篠原さんは、少し前屈みだった態勢を戻した。
私は、隣の彼を出来るだけ刺激しないよう、そっとソファに座った。

「・・・高速道路の渋滞の一番の原

因って、知ってますか」

答えを期待しない疑問文から、私は、私の日々思っていたこと、そこから沸いたふざけた妄想、結果、篠原さんにした仕打ち、出来るだけ時系列で、それ以上に、思いつくそばからすべて、言葉に変換し、声に出した。言い訳は、声にしてから、「すいません、言い訳です」と訂正して、すぐ忘れるようにした。人にどう思われてもいい、という気持ちになれることは、そうそうないことで、そういう気持ちになれるほどの覚悟というか信念のようなものをもって、行動に移せているという感

覚は、それはそれで充実していた。
そんな、篠原さんにとってはどうでもいいことまでも、すべて言葉にした。「こんなこと話すのは」なんて前置きや配慮、生温いもの、粘りつくもの、そういうものは出来るだけ省いて。
お天気雨のように一通り話し終えて、そこでやっと、篠原さんがどんな顔をして聞いていたのかが気になった。
彼は眠ったように静かに下を向いて、瞼も、瞳のほとんどを優しく覆って、ただ聞いているという格好ではない。きっと、聞きながら何か考えている、そんな人がとる姿勢。

「・・・ろそろ」
「え」聞き取れない、小さな低い声だった。
「休憩。もうおしまい」
「ああ・・・」
なんだそれ。これだけ話して、彼は、何も言わないのかな。少し哀しかった。いや、かなり哀しかった。けど、篠原さんはまだソファに座ったままで、私もそのまま、次の彼の言葉、動き、何かを待った。
「君は賢い。本当に。信じられないくらい・・・。あとそれ以上に、馬鹿。想定外の馬鹿だ」
少し肩透かしなタイミングの反撃に、つい言い返しそうになる。で

も、なんとか顔に出さずに済んだはず。
「キューイチだよ」
音は聞き取れたけど、何の意味も見いだせなかった。
「９たい１。さっきの話してくれた真山さんの言葉はほとんど９１だった。たまに７３や６４にもなったけど、それは、すぐ言い訳だと謝った。正直、感動した」
彼はポケットから左手を抜き、寝起きの挨拶のように垂れたまま、私の前に差し出した。「ほら」
小指だけが、きれいに折れている。
彼は続ける。「こんなの初めてだ。小指だけになることは今までにもな

かったわけじゃない。けど、そんなの一瞬だ。あんなに薬指がずっと伸びてるなんてこと、ほんと信じられないよ。だから、なんて言っていいのか分からない。勝手に俺の体のことを言い当てたのも君が初めてだ。もうお手上げだ」
今度は、私が黙る番だ。
そう思ったらすぐ、彼も黙ってしまった。
少しして、「よし、仕事に戻ろう」と、彼はソファから立ち上がった。
きっとそのまま彼が立ち去っても、この時の私には何も言えなかったと思う。
「ケータイもってる？」

頷いた私を見て、彼は、メールしたいからアドレスを何かに書いておいて、と伝えた。
私は「はい」とだけ返事をした。
彼は先に休憩所を出て行く。
手にしていたペットボトルの最後の一口を飲んだ。
これが甘ったるいミルクティーだったのを知った。

あの後、私は売り場に戻り、すぐに持っていたメモ帳にメールアドレスを書いて、一枚破った。
彼はカップ麺を売り場に補充した帰りに、そのメモを受け取っていった。

和菓子売り場には、その後1人だけお客さんが来た。
私は彼よりいくらか早く、いつもの時間に売り場をあとにした。
その日の夕飯はカレーライスだった。
いつも見るお笑い番組のあと、お風呂に入った。
お風呂から部屋に戻った直後、ケータイが鳴った。
こんなにも驚くものかと思った。心臓マッサージで蘇生させられた時ってこんな気分じゃないか、と思った。
冷静になると、着信音はメールのものではなかった。

親友の真梨の他愛ない話が駆け抜けていった。
はあ、なんだかほっとさせられてしまった。
今日、篠原さんからメールが届くとも限らないんだ。
私は机に向かい、英文法の参考書を開くことにした。
勉強って、なんて簡単なのだろう。
時間をかければ、その分は理解できる。参考書なんてのがあるくらいだから、すでにある知識、常識を頭に詰め込んでるだけだ。
どこの参考書に、ホントと嘘の割合を指の数で表す人間が登場するだろうか。誰かの夢の中なら出てくるか

もしれない。もし世界のどこかにいることを知るにしても、ほとんどの人はそれをテレビで面白おかしく紹介されるのを見て、明日には忘れて、結局、夢で見たのと同じことかもしれない。
でも、もしも自分がそういう人間として生まれたら。
もし、そういう人と同じバイト先で、その人とメールのやりとりをする仲になったら。
その時は、自分の目で見て、自分の耳で聞いて、自分の頭で考えるしかない。
私は、深夜1時をまわった頃、ベットに潜った。それから1時間ぐらい

考え事をして、最後にケータイのディスプレイで見た時刻は、2時21分。
結局、その日、篠原さんからのメールはなかった。

次の日の正午前、彼からと思われるメールが届いた。

件名／小説「ンソ」
物語とはフィクションである。
フィクションとは嘘。
すべての物事に意味などない。
それだけが唯一の真実だ。
意味というものは物語と等しい。

よって、この物語も、もちろん
フィクションである。

こう書き出された文章は、件名にあるように、小説のようだった。2文めにさっそく出てきた「嘘」という言葉は、他でもない、篠原さんのものだ。
主人公は、生まれつき特殊な指を持つ少年。彼の指は、自分に対して向けられた言葉の真実、あるいは嘘の割合を、本人の意識とは無関係に顕示する。１割の嘘に対して、彼の左手の小指、そこから、２割、３割と増すにつれ、薬指、中指、といった具合に折れる指の本数がその割合を

表す。６割以上の嘘は、握り拳になった左手に加えて、右手の親指から順に折れていく。

どうしてこんな体に生まれた。
そんなことに意味はない。
僕以外の人みんながこんな指なんて持たなくても、僕はこの体で生きなければいけない。
それだけが真実。
割合は多かれ少なかれ、世界のすべては嘘でできている。
真実は、いつも孤独な闇でしかない。

その日から、決まって昼の12時前

に、いっぱいに書き込まれた彼の文章が届けられるようになった。
そのかわり、というのだろうか。
週末、私が和菓子売り場から眺める景色の中に、彼の姿はなかった。
あの休憩所で話した次の日、加工食品部のマネージャーに彼から1本の電話があったらしい。
彼は、突然バイトをやめた。
それでも、いや、そのかわり、というのがやっぱり正しいのだろう。篠原さんからのメール、孤独な彼の物語は、欠かさず私に届いた。
毎日届くと分かれば、私も欠かさず、それを読んだ。
小学校の親友、中学校の初恋、親と

生活する日常の苦痛、卒業間近に初めて他人から受けた愛の告白、そんなありふれた題材で語られる１つ１つの話が、彼と向き合う１人１人の嘘の割合、それを知る彼の目線で進んでいく。
私は、時には一晩中、もし私が篠原さんだったらどうしただろう、などと考えた。物語の中の彼は、悲しいくらいに悩まない。悩む余地などないんだと思う。彼が、こんな言葉を呟いていた。

コミュニケーションは、誤解を
前提としたその寛容さの上で
のみ成り立つんだ。

よくは分からないけど、篠原さんは、甘えるとか、人に優しくするとか、ただ人に何かを伝えるとか、そういうことがどんどん出来なくなるんだと思う。それが自然なんだと思う。大人になればなるほど、彼は迷わず孤独を選ぶのだろう。私も、真剣に考えるほど、それが正しいとさえ思った。でも、正しいとか正しくないとか、そんなのも無意味なんじゃないかな。悩まない彼の分も、私はこの小説を読む間、悩み考えようと思った。私は篠原さんではない。その私に、彼が、この物語を聞かせてくれることだけが唯一の救い

のようにも思えた。

夏休みの終わりに、私は 和菓子売り場のバイトをやめた。
元々、次の人が見つかるまでの短期の採用だった。私も来年の初めには大学受験を控えている。
新学期を迎え、すでに篠原さんからのメールは50通を超えていた。
物語の締めくくりで、主人公の彼は、私と出会う。あるスーパーの食品売り場で。
その話は、数十行であっけなく終わった。
彼はこれまでとまったく同じ方法で孤独の選択をしたのだ。いかにもそ

んな風な書き方だった。
「嘘・・・」
私は悔しかった。客観的に見ても、この小説の中で一番くだらない、と思った。私以外の人間がこれを読めば、とても自然な話なのかもしれない。けど、この物語に書かれていない真実を、私は知ってる。毎日欠かさずこの小説を私に届ける、そんな彼の存在を。特別な指なんてなくても、その真実とくだらない嘘が、私には分かる。
私は篠原さんに初めての返信を送った。
1週間経った今、まだ彼からの返事は来ない。

件名／篠原さんへ

好きです。

嘘だけど。

プロローグ
「ひらいたひらいた ー1981年12月ー」

今日は篠原家の記念すべき日になった。
12月、大晦日の深夜11時57分、僕は分娩室に呼ばれた。
「トオル。おーいお父さんだぞ。ああ、よしよしよしよし。がんばった、がんばったなあ」まさに今、篠原家に初めての小さな命、0歳のメンバーが加わったのだ。
無事という言葉が出産の報告に使われる理由がよく分かる。分娩室には、その言葉に見合う壮絶さの余韻が感じられた。
同時に、妻にもトオルにも底知れぬ感謝の思いが込み上げてくる。
「がんばったな。ありがとうな、マ

ミ、トオル」
トオルのしわくちゃで小さな手の平がきれいに広がった。
・・・いや、左手の指のいくつかは、まだうまく伸ばせないようだ。
その時、妻が、疲れ切った優しい声で、トオルの名を呼んだ。
「トオル・・大好きよ」
それまでぎこちなく丸まっていたトオルの、左手の薬指も、小指も、両手の指すべてが、きれいに開いた。

小説＆アプリ作家「平木ノート」

twitter
(意見、感想を心待ちにしています)
@HirakiNote

HomePage
(あとがき、今後のリリースなど)
「スクランブル・デパート」
→サイト名をGoogle検索すると、
一番上に出ます。
→http://sites.google.com/site/
scrambledepart/

小説「ンソ」(スマートフォン用)

http://p.booklog.jp/book/29930

著者：平木ノート
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/hirakinote/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/29930

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/29930

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.